

『暗夜行路』における悪女たちのエピソード-栄花の章の形成とその遠心力-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学文芸研究会 公開日: 2009-02-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮越, 勉 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/1249

『暗夜行路』における悪女たちのエピソード

——栄花の章の形成とその遠心力——

宮 越 勉

はじめに

『暗夜行路』（初出は一九二一・一―一九三七・四「改造」に断続掲載。のち、一九三七・九および一〇、現在の構成となって改造社より刊行。）の魅力とは一体いかなるものか。

この作品の長篇としての欠陥はこれまでに多くの評者から指摘されてきているが、そのワンカット、ワンシーンの素晴らしさについては、『暗夜行路』肯定論者はむろんのこと否定論者からも認められてきていることなのである。

たとえば、青野季吉は、『暗夜行路』とは主人公時任謙作ひとりの小説であり、その主人公に内的な発展はないと批判しながらも、「部分部分の愉しさ」をいい、「その無類の部分だけで」、この作品は「立派に永く残ると信ずる。」^①としている。

また、『暗夜行路』ひいては志賀直哉否定論者の代表格である中村光夫は次のように述べている。^②

個々の挿話は神経の行きとどいた筆で描写されてゐる代りに、それらのあひだの有機的な連関や展開がややもすれば無視されて、古い比喩ですが、真珠をばらばらに並べただけで、それをつなぐ糸が欠けてゐる印象を与へます。

中村光夫は、『暗夜行路』全篇について、そこには「倫理」はなく、主人公に「内的な発展」や「成熟」もないと批判しているのだが、その数々の「挿話」は「真珠」のごとき光彩を放つものとして、個々の一場面、一場面の描写力を高く評価しているのである。ただ、その多くの「挿話」間に「有機的な連関や展開」が弱いとしていることには注意しておかねばならない。

ところが、蓮實重彦が次のように述べていることに気がついた。⁽³⁾

この作品が、いかにも弛緩しきったその総体的な印象にもかかわらず、実は細部のイメージや挿話のわずかながいかにも意義深い有機的な共鳴関係をかたちづくりに、志賀に先行する世代や同時代の長篇作家にはとても可能であったとは思えないほどの緊密な小説的な構造体として、読む意識を不断に刺激しつづけている……

この蓮實重彦の評言は、先の中村光夫のものとは正反對のことをいっているように思える。蓮實は、『暗夜行路』における多くの「挿話」に「有機的な共鳴関係」を読み取ることが可能であり、『暗夜行路』の持つ、こうした特有の小説的構造を高く評価しようとしているのである。

以上のことから、誰もが認め得る『暗夜行路』の魅力の最大級のものとして、その数々の「挿話」やワンカット、ワンシーンの卓拔さが挙げられるだろう。さらにまた、これからの『暗夜行路』研究やその作品論が、蓮實の指摘した方向に即してなされるべきであることも言を俟たないのである。

そこで本稿は、その一つの試みとして、『暗夜行路』における悪女たちのエピソード（挿話）にスポットを当ててみようと思う。すなわち、前篇第二の十一から十三にかけて描かれる、いわば栄花の章に着目し、そこから『暗夜行路』全体に波及させて浮かび上がってくる幾つかのテーマや構造美を追尋してみたいと思うのだ。

いま悪女たちといったが、具体的には、栄花とそれと対比的に描かれる蝮のお政を指す。むしろ栄花も蝮のお政も『暗夜行路』の小説の現在時において直接登場してくるわけではない。主人公謙作の回想シーンを通して幾つかの「挿話」を形成するのだが、その一つ一つがきわめて印象深いものとなっているのである。

本稿は、まず、栄花および蝮のお政のモデル考から始める。栄花のモデルについては、後年志賀が談話記録「木下利玄の思出」（一九五四・二、ラジオ東京・一九五

七・二、「心の花」の中で述べているように、広勝という娘義太夫だと既に知られている。が、さらに、直哉と広勝とのかかわりは古く、志賀の習作期・初期にまで遡ることができることから、『暗夜行路』栄花の章に至るまでのその形成過程を辿ってみたいと思う。もう一方の娘のお政については、後述するように、『暗夜行路』の現下の研究状況ではそのモデルについて確実なものが得られていない。しかしながら、私見として、そのモデルと想定できる人物がある程度まで突き止めている。いささか横道にそれるかもしれないが、この娘のお政のモデルから、『暗夜行路』の抱える時代性やその背景にも目を向け、作品理解の一助にしたいと思うのだ。

栄花の章とは、その内容を簡潔に述べれば、謙作（その母と祖父との不義の子であると自身の出生の秘密を明かされて一ト月余り経っている）が、今は周囲から「悪辣な女」と指弾されている桃奴という芸者（昔は栄花といった娘義太夫）に同情を寄せ、女の罪ということに考えを巡らす条である。この間、その生のあり方において栄花と対比されるのが娘のお政である。謙作は、過去の罪を売り物にしている娘のお政よりも、今なお悪事を働きつつある栄花の心の張りを高く評価する。が、当然

ここには女の罪という問題が重く横たわり、やがて謙作の母、そして直子がそこにかかわってくることになる。つまり、栄花の章を一つの核とすれば、その前後に配置されたさまざまなエピソードやワンカット、ワンシーンはどのようにからんでくるのか、栄花の章のいわば遠心力といったものについて考察してみたいと思うのだ。

一

栄花のモデル広勝を祖上にあげる前に、娘義太夫に関する基礎的な知識を得ておきたい。その際、水野悠子の労作『知られざる芸能史娘義太夫』（一九九八・四、中公新書）が多くのことを教えてくれる。この著書から主に明治期における娘義太夫の歴史について要約すると次のようになる。

明治の中期に最もポピュラーで最も親しまれていた芸能は、落語、講談、そして義太夫であった。特に若い娘の演奏する義太夫は娘義太夫と呼ばれ人気が高かった。女義（娘義太夫の略称）の歴史では、竹本京枝、竹本東玉、竹本綾之助の三人が女義中興の祖と呼ばれるが、とりわけ、一八八五（明治一八）年、大阪から上京して来

た十一歳の少女綾之助はたちまち人気を集めトップスターの座を射止めたのであった。なお、娘義太夫ブームは時期的に一八九七（明治三〇）年をはさんだ十数年が絶頂期であったという。

娘義太夫には学生親衛隊である「どうする連」がつきものであった。小土佐は明治、綾之助は慶応、住之助は早稲田というふうによりて「どうする連」も色分けされていたという。綾之助のブームが去ったあと女義は一時かげりを見せるが、一九〇一（明治三四）年、これまた大阪から上京して来た豊竹昇菊・昇之助という姉妹の活躍によってその人氣は挽回された。義太夫は、原則として太夫（語る人）一名、三味線一名で演奏され、太夫・三味線の順で呼ばれるのが慣例だが、昇菊・昇之助の場合だけは逆の方が定着してしまっ。昇菊は美貌の持ち主で、昇之助は綾之助を彷彿させるザン切り頭であった。志賀直哉が妹の昇之助のファンであったことは有名である（水野悠子は志賀日記から昇之助に関する記事を幾つか引用紹介している）。が、綾之助と並ぶ二大スターということでは、もう一人は豊竹呂昇である。呂昇は蓄音機の広告にも使われた。また、志賀の『暗夜路』にも呂昇のことは実名で出てくる（前篇第二の四）。

明治四〇年代になると女義は不振という感じを漂わせてくるが、組幸や朝重などの新しい人氣者も生まれた。さらに時代が下ると、関東大震災で寄席が壊滅状態となり、以後急速に女義は衰えていく。大衆は女義から離れて映画や浪曲にその関心を移していったのである。

以上のようなことを水野の著書から教えられた。

さて、若き日の志賀直哉が娘義太夫熱に取り憑かれ、とりわけ「アウフ」こと昇之助の熱狂的ファンであったことは、後年の小説「蝕まれた友情」（一九四七・一、二、三、四、「世界」）や談話記録「娘義太夫のこと」（一九四七・四「苦楽」）を参看するまでもなく、よく知られている。が、いま注目したいのは昇之助ではなく広勝の方である。

志賀日記を通読すると、一九〇四（明治三七）年、一九〇五（明治三八）年は娘義太夫に関する芸評記事が頻繁に出てくる。むろん昇之助に関するものが目立つが、素行、小清、小政（前掲の「娘義太夫のこと」によると当時「この三人が婆さんで真打だった」という）、小土佐、吉花、団菜などのほかに、広勝の名が散見できる。次にその広勝に関する記事の主なもの掲げてみたい。

★「次の広勝の鈴ヶ森実」に下手なり」（04・2・1）

★「広勝の宿屋から聞く 全く駄目なり 此女木下の隣りの今川焼屋の娘の由。」(04・2・3) ★「広勝の家の前を通つたら、硝子障子の中で野崎の三味線を弾いていた、」「広勝の名はお竹と云ひて軍人の娘なさうな、」(04・2・17) ★「広勝 白石。上手の中にはさまれて苦しうなり 一つの修業なり。」(04・4・16) ★「広勝の家の前を通りしに角に出て居たり」(04・4・18) ★「広勝の鈴ヶ森は一寸よし、此人は矢張悲劇的なり」(04・5・14) ★「広勝の酒屋中々よく」(04・7・30) ★「広勝の中將より聞く 余程上達したり」(04・9・2) ★「此日浮びたる想……木下と広勝より落想せるものなり、」「女主人公の境遇、海軍士官の私生子にて幼きより其母にすら離れ深川辺の亀の子焼きの養となる。……」(05・1・16) ★「広勝の日吉 此人にして近来の大出来、」(05・2・20)

これらの日記記事からいえるのは、広勝の芸はあまり上手ではないものの、たまたまその隣家に住まう友人の木下利玄を通して広勝に関する情報が入ることから、次第に直哉は広勝に特別の関心、さらには親近感さえ抱いていったと考えられるのだ。こうして、未定稿「お竹と

利次郎(梗概)」が一九〇六(明治三九)年一月九日に執筆された。そのあらましは以下のようなものである。

お竹の母お静は横須賀大津の菓子屋の一人娘で或る海軍士官に愛された。やがてお竹の兄某、さらにお竹を生むが、まだ正式に結婚をしていなかった。そのうちお静は産後の肥立ちが悪く死んでしまう。父の海軍士官も日清役で出征し戦死した。こうして孤児となったお竹は深川の南山のうやま午太郎の養女となる。南山夫婦もやはり駄菓子屋をしていた。

お竹の気性は、「甚だ勝気」、「束縛を悪み、自由を喜べり、」とされる。よって学校を嫌い、学校には行かない。音楽を好み、七歳より義太夫節を学び、初代早の助に師事して竹本を名乗り、小早といった。十二歳で高座に上り、十五歳までが全盛であったが、師匠早の助の模倣を脱すべく独立したあたりからその運氣がかげり始めるのだった。

お竹には芳の助という幼馴染みの男がいて相思相愛の仲であったが、互いに「剛慢」なため、この恋は実りそうにない。一方、お竹の隣家に大名華族の若様森上利次郎がいて、森上家にいい水の出る井戸があり、お竹がもらい水に来ることから、ここにも恋愛が芽生えかけるが、

森上家の監督も厳しく、その恋は成就には至りそうにもない、とされる。

右のような内容から、この未定稿作はのちの『暗夜行路』前篇第二の十一を形成する部分を多くふくみ、整視できないものがある。が、この未定稿作に限って言えば、「重な部分、即ち三人のからまつた恋を写すのが主眼である」としながらも、上述の展開からして、お竹が悲劇のヒロインとなる行末が見て取れるとしてよいだろう。その点で悲劇志向の強い志賀習作期の特徴が出たものといえる。

さらに突っ込んだ検討を加えるならば、志賀は木下から広勝に関する情報を得ているのだから、お竹（広勝）の生い立ち、およびお竹と森上（木下）の間柄は書き易かったろうが、お竹と芳の助の關係は志賀の創意にかかわることから、芳の助には志賀自身が重ねられていたふしがあるとしておきたい（このことはのちの未定稿作で明確となる）。

この「梗概」未定稿作の末尾の方には、「着想せし時は自分いささか得意なりしが概略を書いたら、もう愛想尽かしてある、」と記されている。が、「然しこれを出来るだけ短篇に書いて見やうかしら」と今後の抱負も述べ

ていたのである。

その試みは、「清作と云つた女」という未定稿作（二種あり。紅野敏郎は一九一二年頃の執筆と推定。）となつて残されている。清作きよさくという娘義太夫は、「小柄な、肉のしまつた、少し青白い顔をした、神経質らしい美しい女」とされ、その境遇は先のお竹のものを踏襲する。が、ここでは「自分」なる人物が出てきて、語り手になり登場人物の一人にもなっていて、どちらかといえば自伝的な感じの強いものとなっている。そして、「親しい友のT」（↑利次郎↑利玄）が、「自分」（直哉）よりも先に、清作（↑お竹↑広勝）を好きであると発表してしまつたことから、「自分」は彼女に対する好意を秘めるしかなかつたことを告白している。その後の展開がなされていないので未定稿作となつたのだが、直哉の広勝に対する関心は持続していたのである。

次に、一九一三（大正二）年六月二四日、未定稿「マリイ・マグダレーン」が執筆された。冒頭、「作り話のやうな、然し本統の話です。」と書かれている。これは信用していいもののように思う。

「私」（直哉）は、或る演芸雑誌（「演芸画報だつたか演芸倶楽部だつたか」と記されその記憶は定かではない）

の記事から、元、竹の助（広勝）といった娘義太夫が芸者となって近頃桃の助という名で柳橋から出たという情報を得る。これを起点として回想部、さらに現在時点に戻る形でさまざまなことが綴られていくのだ。

この未定稿作のポイントは次の三点にある。

第一は、昇之助と竹の助（広勝）とが対比的に回想されていることだ。この時期になると志賀の娘義太夫熱も下火となり、過去を客観視できるようになっていたのである。かつての娘義太夫熱において仲間うちではその「芸」を味わうためという不文律のようなものがあり、「私」も昇之助に惹かれていた。「アウフ」とあだ名をつけ、賛美の手紙を無名で送ったこともあったという（志賀日記一九〇四年一月四日の記事でその確認を得ることができる）。が、一方で、「芸」は劣るが、「顔」の美しい竹の助に少なからぬ関心があったことを告白している。竹の助は、「小がらな肉のしまった美しい小娘」で、また「東京者らしいキリ」とした心持を現はした女」であり、「淋しい影」もあったという。かつての昇之助賛美は仲間うちでの虚勢も手伝い、いくらか割り引いてみねばならぬもので、本音としては、「芸」よりもその「顔」にひかれて広勝の方により好意を抱いていたとしていいだ

ろう。さらにこのことを証拠立てるものとして、かつて「お竹と利次郎」というものを書いてみたが、そこでの新八（これは芳の助に当たる）というお竹と恋仲の若者は、「自分のつもりで書いてみた」とはっきりと記しているのだ。なるほど、「お竹と利次郎」はその大半が空想から成ったものだが、「剛慢」な性質で意地が強いとされる芳の助（新八）は直哉にふさわしく、若き日（一九〇五、六年頃）の直哉は広勝との恋を夢見、想像していたのだとここに至って明言できるものとなるのである。

第二は、かつて「お竹と利次郎」を執筆したが、その際、お竹（広勝）がその「ゴーマン」ゆえに恋も失い義太夫語りの道も閉ざされ「自棄的になつて行く」運命を予見した、それが今の竹の助（広勝）の運命とほぼ見合っているものになった、その「不思議な暗合」を思いかみしめていることである。竹の助（広勝）の運命とは、三代目綾の助になる修業の最中、近くの本屋の息子と恋仲となり身を隠すもののやがて見つかり無理に離され、腹に出来た赤子は墮胎し、そのため声が出なくなる、自棄を起こして箱屋と一緒に越後へ行き芸者となり、さらに北海道へ渡った、というものである。まさに流転、転落の人生である。

そもそも「不思議な暗合」は、志賀文学全体にわたる重要なテーマの一つになっている。たとえば、「剃刀」(一九一〇・六「白樺」)執筆の余談として、いかに剃刀で客の咽を切るのかとそのシーンを作者が思案し想像していたのと同じ頃、自分の隣家の大島圭介氏の三男が西洋剃刀で自殺を計った、そういう「不思議な偶然」「妙な偶然」があったことを述懐している(これは「剃刀」掲載の「白樺」の「六号記事」および「創作余談」)。また、「焚火」(一九二〇・四「改造」)におけるKさんとその母とのテレパシーの交信を語った「不思議な話」も広く暗合の一致のテーマを扱ったものといえるだろうし、晩年の「盲亀浮木」(一九六三・八「新潮」)は紛れもない暗合の一致の体験談を語っているのだ。

「マリイ・マグダレーン」に話を戻せば、竹の助(広勝)が北海道に渡ったあたりまでは、森本という友人(木下)から聞いたこととなっている。そして今、或る演芸雑誌からの情報で竹の助(広勝)が柳橋の芸者になっていることを知ったのだ。

『暗夜行路』では、謙作が「或日何気なく演芸画報を見てみると、其消息欄に栄花が柳橋から桃奴といふ名で出たといふ事が書いてあった。」(前篇第二の十一、傍点

は引用者)とされている。が、実際は、「演芸画報」ではなく、「演芸倶楽部」の一九一三(大正二)年五月号であることを突き止めた。そこには「続女義の行方」なる記事が掲載されていて、「竹本広勝」に関する消息も十数行にわたり綴られている。いささか横道にそれるが、「続女義の行方」の内容をここで紹介しておきたいと思う。これは先の水野悠子の著書では触れていないものであり、華やかなスターとして脚光を浴びていた娘義太夫たちのその後を知ることができるのである。

「続女義の行方」の筆者は「箱屋の三公」と署名され、前年の「十二月号」では「古い人が多かつた」、「私は新しい女義の行方を書いてみようと思ひます」、「雷事(たが)実の有りの儘、懸値なしに書く丈けです。」と前置きされる。記事は、「◎昇之助昇菊の巻」「◎芸者の巻」「◎お妾の巻」という三部構成になっている。ページ数にして七、八ページ分のものである。

「◎昇之助昇菊の巻」は、この記事のトップを飾るメインの消息といえる。たまたまこの記事の中に「竹本広勝」のことも載っていたのだが、志賀はそちらの方に心が向いて「マリイ・マグダレーン」を執筆する。かつては昇之助に夢中になっていたというのだが、昇之助の

その後のことには全く関心が向かわなかったようだ。先に私が、かつての志賀の娘義太夫熱において彼は昇之助よりも内心広勝にこそより魅せられていた、とした証左がこのことから得られたように思う。

ついでながら昇之助昇菊の「行方」を記しておこう。妹昇之助は姉に先立ち四年前、大阪のラムネ屋に嫁入りした。相手は、幼馴染みで、役者のような可愛らしい男で、この亭主には数十万の資産があったという。一方、姉昇菊にも縁談の口があったが、妹の亭主と比べ、適当な相手がみつからず、二十六歳になっても身が定まらないう。妹に子が出る。すると姉は煩悶、ついにヒステリーにかかった。父親は妹を呼び戻し再び高座に花を咲かせたら姉のヒステリーも治るかと思案していたら、昇之助の婿が肺病にかかった。父親は離婚を勧めるが、昇之助が承知しない。そのうち、婿が芸者に狂い出した。くやしがる昇之助。親は離婚の話をすすめるが、今度は先方がなかなか応じない。ケリがつかず弱っているところに、昇菊を秘かにねらっていた山田という男が現われ、見事この悶着を解決した。良人の花柳病が感染したというのを理由に法律を持ち出したというのだ。こうして昇菊は山田に魅せられ、子まで作るが、この山田という男は、

女義の仲間の土佐玉を女房にしている、すでに四人の子があるうえ、他に二、三の女性とも関係のある有名な色事師であった、というのである。

一世を風靡し、「花の昇菊、昇之助」と詩（木下奎太郎の「街頭初夏」という詩）の一節にまで歌われた姉妹のその後は決して幸せなものではなかったといえるだろう。

次の「◎芸者の巻」には、「女義から芸者、同じ三筋の糸、連絡があつて転居するのに誠に都合が好い。其故が、顔の多少成つてゐる女はちよい／＼移転をする。」が、「裏面には皆無事情が潜んでゐる。」として、「竹本団楽」「竹本友昇」「竹本東繁」「歌沢吉春」「竹本広勝」と主にこの五名の消息を伝えている。

「竹本団楽」は津村慎吾という金持ちの男と夫婦になったが、同棲以来、不可思議なことばかりがあつて、ついには津村の正体が満韓を股にかけた大盗賊であつたと判明したという。津村が捕まったあと、高座にも上れなくなった団楽は、新橋から多丸という芸者になって出たというのである。

志賀はこの団楽にもかなりの好感を抱いていたと思われる。一九〇四（明治三七）年の志賀日記に、「要する

に昇之助は喜劇的 団米は悲劇的なり」(5・2)とか、「団米の柳は悲劇的なものだけに中々よく……」(6・29)とあり、悲劇好みだった若き日の直哉の意にかなう娘養太夫の一人であったとみられるのだ。さらに、「続女義の行方」より三ヵ月ほどの志賀日記には、「元の団米が朝好といつて、吾妻橋の寄席にゐるといふ話をきいた。……結局朝好の寄席へいった。十年ぶりで聞いた。」(一九一三・八・一四)とある。団米は、結婚の失敗から立ち直り、また高座に上っていたのだ。

かねがね、『暗夜行路』における広勝をモデルにした栄花という娘養太夫の命名のあり方は、その両者にあまり通じるものがないのを不審に思っていた。が、栄花という名は、イメージ的にも広勝につながる団米を経由してその「栄」の字を拝借し、それに「花」をつけて出来上がったのではないかと想像する。それにしても栄花という名の響きは美しく悲しくもある素晴らしいものと思ふ。

「竹本友昇」は、甲府第一の富豪を生け捕って親は大喜びであったが、友昇が浮気をして、千円の手切金をもらい、それを資本に今では秦野で芸者屋を開業しているという。「竹本東繁」は、横浜で「堂摺連」の情夫と宿

屋へ泊り込み、そこに風俗係が飛び込んで来て淫売と認定され警察に引立てられ、女義界から除名された。そのあと、葭町から芸者となって出たが、浮気の仕放題で土地にいられず、今では旅芸者になっているという。「歌沢吉春」は、「跡押し連」の一人と恋に堕ち、失踪したが、捜し出され、今では芸者として成功しているという。問題の「竹本広勝」に関する記事は次に全文を引用する。

多大の望みを属され、未来の看板を以て期待された広勝、渠は如何に。箱屋の光公と云ふ情夫の為めい幼少から育てられた、大恩ある養父母を振捨て、隅玉と共に旅にさまよつて居たが、終に新潟で芸者に売られ(光公の為めに)東京の太棹芸者で新潟の花柳界を席捲したが、余り濫売を仕過ぎたので、忽ち飽れてしまひ、亦転売されて北海道迄流れ込んだが、昨年東京に舞戻り当今は柳橋で花奴と謂つて発展して居る。身から出た錆とは謂ひながら広勝は體のあらん限り悪足光公母子に仕送りをせねばならぬ。渠には容易ならぬ秘密がある。其弱点を前科のある光公が握つて居る。其秘密は? こゝには書くまい唯憫れなる女広勝よ。

右の文中で「渠には容易ならぬ秘密がある。其弱点を前科のある光公が握つて居る。」の部分^は他の文字よりも大きな活字が使用され、強調されている。志賀が目止めた記事とはこれに間違いないだろう。志賀は木下利玄から「広勝」が北海道に渡つたまでは聞かされていたのだが、いま偶然にも「広勝」の新しい情報（柳橋から芸者で出ている）を手に入れたのである。

三番目の「◎お妾の巻」には、「金十五円のお手当では妾の部には這入れぬ」、「真正にお部屋様の待遇を与へられて居る者」はごくごく少ないとして、「二代目綾之助」（初代の弟子ではない）と「竹本愛子」の二人を取り上げている。いずれもお妾さんとして成功者であるとしている。

「竹本広勝」に関する記事を紹介するのが目的だったが、他の女義の「行方」にまで触れてしまった。アイドルスターたちのその後はまさに明暗、悲喜交々である。が、そのなかで広勝はいささか異質ではあるまいか。

まず、彼女は私生児であり孤児である。初期の志賀は「孤児」（一九一〇・七「白樺」）なる作品も書いていて、もともと不遇な生い立ちの女性には同情心が厚い。また、広勝には「容易ならぬ秘密」があるとされるが、志賀は

すでにそれを噂として知っていた。広勝には墮胎あるいは嬰兒殺しがあったというのである。ここには犯罪の匂いが漂う。初期の志賀は殺人などの刺激性の濃い題材にはことさら強い関心を抱いていた。「マリイ・マグダレーン」の執筆後わずか三ヶ月ほどあとの「范の犯罪」（一九一三・一〇「白樺」）で、范の妻は自身の産んだ赤子を死なせてしまうが、それは過失なのか、故意のもの（嬰兒殺し）なのか判然としないものにした。ここには広勝の嬰兒殺しにかかわる噂が微妙に介在し、その形象化がなされたようにも思われるのだ。

さて、「マリイ・マグダレーン」の第三のポイントとは、これが現在進行形のもので、未定稿作とならざるを得なかったということである。

この作の末尾はどうかといえば、石川という年上で銀行に出ている男爵の友人（岩倉道俱がモデル・阿川弘之^{（註）}）によると岩倉具視の妾腹の子）から「私」に電話があり、やがて二人で或る待合に出掛けるところで切れている。ここは志賀日記一九一三（大正二）年六月二二日の記事にぴったり符合する。岩倉から電話があつて直哉は外出し、やがて二人で柳橋の「喜代中」という待合から「広勝の桃奴」を呼ぶが、彼女は「御参り」で来られ

ず、別の芸者から彼女が「毒婦に近かい女」になっていることを聞かされたのである。その二日後に「マリイ・マグダレーン」が執筆されたのだが、広勝との今後の接触を期待してか、ひとまず中断されたのだと考えたい。

ここはむろんのこと、『暗夜行路』前篇第二の十一を形成する素材の一つとなった。ただし、『暗夜行路』では、兄信行と石本（岩倉道俱がモデル）が連れ立って赤坂福吉町に住まう謙作を訪れ、その晩は三人で柳橋の或る待合に行き、桃奴を呼ぶものの現われず、居合わせた別の芸者や女中が、「昔の栄花、今の桃奴」が「悪辣な女」になっていてその具体的な事例の数々を噂として持ち出す、というものになっている。ここから謙作の「昔の栄花」に関する回想へと展開されていくのだが、その内容についての考察は後回しとする。

ともあれ、『暗夜行路』栄花の章の淵源は古く、直哉が娘義太夫に熱中していた一九〇四、五年頃にまで遡ることができる。栄花のモデルは竹本広勝なのだが、若き日の直哉はむしろ昇之助以上に広勝への関心が強かったようで、その後、折にふれ幾度も彼女をモデルにした創作が試みられ、ついには虚構の作『暗夜行路』に組み込まれるに至ったのである。

嫂のお政のモデルについて考察してみたい。

まずは、嫂のお政が『暗夜行路』の中でどのように描かれているかをみておこう。謙作は「先年」京都において、夜おそく「祇園の八坂神社の下の場末の寄席といったやうな小屋」の前を通りかかった際、「懺悔する意味で」「自身の一代記」を芝居にしている嫂のお政を見かけたという（前篇第二の十二）。これも『暗夜行路』という小説世界における現在時（ここは謙作が大森に移転して直後のこと）に挿入された回想シーンの一つであるが、栄花のようなかなりの昔のこととは違って、近接過去のような感じを与えている。その折の嫂のお政は、「長いマントを着、坊主頭に所謂宗匠帽を被った、大きな一見男と思はれる」、年の頃は「五十余」の女であったとされる。また、謙作は、嫂のお政の経歴やその悪事の内容をほとんど何も知らなかったという。だが、後篇第三の十三において、謙作が直子に「あなたは嫂のお政と云ふ女を知つてるかしら？」と質問すると、直子が「何だか、講談で読んだ事があるやうよ」と答えており、

娘のお政のことは講談（本）にまでなり、広く巷間に伝えられていたのだとすることができらう。

これらの材料からそのモデルを探索していかねばならぬのだが、栄花の場合と違い、一筋縄ではないものがある。

遠藤祐による『暗夜行路』の注釈では、「どんな人物か、不祥。」とされていて、以後そのモデル問題は長い間手つかずの状態であった。だが近年、江種満子は、福田英子とのかかわりから「お政」こと「島津政」なる女性が「娘のお政と同一人物と想定される」との説を提出した。⁽⁷⁾なるほど、「能く獄則を遵守して勤勉怠らざりし功により、数等を減刑せられ、無事出獄して、大に悔悟する処あり、遂に円頂黒衣に赤心を表はし、……又演劇にも島津政懺悔録と題して仕組まれ、自から舞台に現はれしこともありし」（福田「旧姓景山」英子『妾の半生涯』一九〇四年、引用は岩波文庫版・一九五八年による）とされる「島津政」は、『暗夜行路』に描かれた娘のお政の容姿や行動に吻合するところ大であって、これでモデル問題も解決したかにみえた。

ところが、何気なく手近にある人名辞典の類から「娘のお政」の項を調べているうち、次のようなものに出く

わした。

生没年不祥 明治期の窃盗犯。本名内田まさ。何回も盗みを働き刑事たちから娘のお政と呼ばれた。五回目の刑を終えて出獄し、その後悔話を『報知新聞』に連載した。最初の犯罪は明治一五年（一八八二）地方の大家の娘の行儀見習と偽って東京日本橋の蒲鉾屋に雇われ、夫渡辺清次郎とともに土蔵の中の金庫を破り三二〇〇円を盗んだもの。重禁固二年の刑で入獄するが、出獄後も同様な手口で盗みを繰り返し、五回目はついに重禁固五年の刑となる。手記は女囚の獄中での生活を赤裸々に語っており、評判になった。『幕末明治女百話』

娘のお政と呼ばれた人物は実在したのであり、その本名は「内田まさ」というのである。右に引用した辞典記事のもとになったのは、篠田鉷造『幕末明治女百話』（後篇）（昭和七年四条書房より刊行。が、「内田まさ」へのいわゆるインタビュ어가なされた時期は不明。なお、現在では岩波文庫（一九九七・九）になっていて容易に入手できる）である。篠田鉷造の聞き書きによるもので、なるほど「牢内はツルが要る」以下の話は興味深いものがある。これによると、「内田まさ」が、夫渡辺清

次郎とは別の駄菓子職人の胤を宿し病監で出産するも赤子を亡くしてしまったことや、夫清次郎との間に出来た最初の娘お清（表面上は妹）と市ヶ谷監獄で出会ったこと、さらには牢内で一緒になった箱屋殺しの花井のお梅の様子など、ドラマチックな数々のエピソードが語られている。しかしながら、この「内田まさ」が、その懺悔話を『報知新聞』紙上に書かせてもらったとあっても、『暗夜行路』における蝮のお政のように頭を丸め自身の一代記を懺悔話にして芝居にかけたとは一言も話していないのである。

かくして蝮のお政のモデル考に及ぶに至り、「島津政」と「内田まさ」の二名がそのモデル候補として挙がってきたものの、そのいずれとも確定できないのである。モデルの穿鑿はあるいは文学研究のうえで些末なことかもしれない。が、『暗夜行路』という文芸作品の背後にある世相や時代性が見えてくることもあると思われるので、さらに執拗にこの問題にこだわってみたい。その際、きわめて有益な参考文献となるのが綿谷雪の『近世悪女奇聞』（初版は一九七九・五、再版は一九九〇・二、青蛙房）である。

この綿谷の著書には、雷お新、高橋お伝、夜嵐お絹、

島追お松、島津お政、茨木お滝、今常誓布施いと、雲霧のお辰、花井お梅、権妻お辰、蝮のお政、幻お竹、班猫お初、大阪屋花鳥、姐妃のお百、鬼神のお松、大経師小町おさん、以上十七名の「悪女」が取り上げられている。

「元禄期以降、特に幕末から明治の前半期へかけての悪女を中心に集めた」（「あとがき」より）というこの著書は、膨大な資料に基づき執筆、論評されていて、とりわけ明治期の世相史の側面で教えられることが多い。

以下、綿谷の著書をもとに、いま問題の「島津お政」と「蝮のお政」（内田まさ）についてその内容を要約しながら、私なりの『暗夜行路』における蝮のお政のモデル考の結論を導き出したいと思う。

綿谷雪は、「島津お政」について「毒婦の実演は表むきは懺悔という形になっていて、その例をつくったのは大阪の島津お政が元祖だと思う。」としている。さらに悪婦の実演は、島津お政から、雷お新、花井お梅、近くは終戦直後の阿部お定が行なったとしている。

さて、「島津お政」の「履歴」だが、綿谷は、明治二一（一八八八）年九月末に刊行された吉田香雨の『悪事悔俊／島津お政の履歴』という薄っぺらな本が最も信用できる資料として、そのシノプシスを綴っている。

お政は、十四歳の折、有名な富豪の家へ女中になるが、その二、三年後、別家の一子某（ぼんぼん）に口説かれて私通したことから、仲を裂かれ実家に帰された。

お政は、実家の継母とは折り合いが悪く、家出する。その後、負債を抱え窃盗もするが、やがて怪盗犯田安蔵なる大男と知り合い、ひょんなことから二千円近くの大金が入り込み、この世の名残にとその大金を派手に使おうと決意する。男装して島津春三郎と称し、馴染みの芸妓を五、六名もつれて遊びまわった。比叡山の白道上人に懇々と教化され自首しようとした矢先、探偵吏に捕まった。明治一四年二月二六日、大阪裁判所で無期徒刑の判決を受けたが、その悔悛ぶりは著しく、人の倍働いたという。明治一六年二月には懲役一〇年に減刑された。牢頭の雷お新が中心になって牢破りを企てたが、お政は仮病をつかい、脱走には加わらなかったという。明治一八年二月以降、獄則勤守の賞状をもらうこと前後四度、明治二〇年には国事犯の景山英子と同室となり、やがて義姉妹の約を結んだ。放免は明治二〇年一〇月一七日であった（綿谷は同年二月一〇日に放免としている）。

問題はその後の「島津お政」のことである。綿谷雪は何を根拠にしたか明記していないが、次のように綴って

いる。お政が出獄した明治二〇年の年末頃には住吉の寺で黒髪を下ろして尼になり、托鉢と勤行の修業に打ち込んだ。その後、大阪歌舞伎の花形中村鴈治郎が中心になって、お政の経歴を劇化して「島津まさき菩提日記」の外題で上演することになったが、稽古の段階で当局から禁止されてしまった。その脚本を下っ端役者が手に入れ、それを書き直してタンカラ芝居の一座を組み、堀江の小芝居の舞台にかけて大評判となって、七三日通しての大入りを記録したという。一方、お政は、ほとんど毎日この芝居を見に通い、自然とセリフや動きを覚え、自分で自分の芝居をやってみようかと思いついた。「改心劇」と名乗って道頓堀の弁天座で旗上げをする。連日の満員で、大阪を打ち上げてからも全国津々浦々まで股にかける盛況をさわめた。年齢の進行とともに、勧善の主旨を演舌するようなことを始め、芝居は役者にまかせ、自分は懺悔の講話をするようになった。ドサ回りは案外長く続き、入場料の大半は社寺への寄付金となった。芝居をやめたのは大正年代のはじめ頃で、年齢も六十何歳かになっていた。

綿谷雪は、毒婦の実演は興行師の奸策におどらされた気味が強いといいつつも、「島津お政」の場合は、むしろ

ろ大真面目な勧善色の方が濃かったようだとして、かなり弁護的な肩入れをしている。

ともあれ、「島津お政」が出獄後、尼となり改心劇や懺悔の講話を全国津々浦々まで興行していたというのは事実と受け止めてよい。が、「島津お政」は島津であって、蝮のお政ではない。蝮のお政こと「内田まさ」は、いわば自分の後輩に当たるが、その蝮のお政という異名を借り、芝居に出るものだろうか。悔悛著しく、大真面目なものであったというのであればなおさらのこと、同時代の蝮のお政（内田まさ）を名乗ったとはとても考えにくいのである。

綿谷雪は、「蝮のお政」（内田まさ）について、「前科十犯」、「十犯という累犯であるところが女の犯罪としてはボリュウムであろう。」としている。最後の入獄は明治三一（一八九八）年だが、その入獄の直後の明治三二年の『都新聞』に蝮のお政の実歴が探偵実話として連載され、同年二月に菊判三冊本にまとめられて大川屋から出版された。また、「内田まさ」の懺悔話が『報知新聞』に連載されたのもその直後であったという。綿谷は、『都新聞』の連載記録をまとめた三冊本（それに加えて長谷川伸の同題の長篇小説）をもとに「蝮のお政」の経

歴を綴っている。

これは探偵実話というジャンルの読み物であり、すでに多くの粉飾が施され虚実入り乱れていて、そこから事実を掬い取るのはかなりの困難を伴うと思うが、「内田まさ」の面貌を窺い知るためにもやはりその概略を述べておかねばならない。

お政は、愛知県知多郡内海町に、大工棟梁喜左衛門の長女として生まれた。母が死んでから、お政は幼い身空で母替わり（下に妹二人あり）として、まるで男のように身を粉にして働いた。孝貞義者表彰候補となり、孝女はこのお政で決まりとなったが、急にそれが取り消しになった。土地の小学教諭との不行跡が明るみにされたのだ。これ以降、お政の運命は狂い出す。故郷を離れたお政は、或る成金の妾となったり、好いた男と内縁関係になったりしたが、その間、窃盗を何度も行ない、ある時は偽名を使って勤めていた質両替店で放火したのち大金を持ち逃げしたのであった。また、水練を得意とするお政は、怒っている時、なまなかの男なんかより強かったという。刑事に追われると、川へ飛び込んで逃げのびるのだった。出入獄を繰り返すが、その間に好いた男は別の女と一緒にやり、やがて織屋として栄えた。また、一

時横浜で英国商館主の洋妾（ラシャメン）になっていた折には、たまたま自害しようとしていた乞食に出くわして、それが実はあの小学教諭だと知り驚くものの、情けをかけて助けてやり衣類と金銭を与えてやったという。のちにこの小学教諭は更生して巡査になったという。

お政の出獄は、明治三五（一九〇二）年一月であった。綿谷は、さらに篠田鉞造の『幕末明治女百話』（後編）から幾つかを引用し、この「蝮のお政」の章を補強しているが、出獄後のお政についてはほとんど何も知られていないのか記述がなく、ましてや懺悔芝居に実演したなどとはどこにも書いていないのである。

では、モデル考の結論を急ごう。

島津お政は出獄後、改心著しく、尼となり懺悔芝居の興行に出た。が、同時代人の蝮のお政こと内田まさがいのかかわらず、蝮のお政と名乗ってその芝居の看板に掲げたとはい底考えられない。一方、内田まさが蝮のお政とあだ名された人物であったことは紛れもない事実であり、おそらくは水練を得意とする男まさりの大きな女であったろうと想像される。また、むろん興行師がからんでのことだが、同年輩とみられる花井お梅と張り合う形で、懺悔芝居を一時期行なった可能性もなきにしも

あらずである。が、内田まさが自身の罪を悔い、尼となって懺悔芝居に出ていた、という証しはどこからも得ることができないのだ。

そこで私は今のところ、『暗夜行路』における蝮のお政のモデルとして、島津お政が四分、内田まさが六分の割合で考える。が、さらにこだわれば、次のようなことも可能性として全くないとは言えなくなる。

綿谷の著書によれば、明治の中頃、島津お政の懺悔芝居を真似てか「祇園」で懺悔物語を興行していた高橋お政なる人物がいたという。また、これは篠田鉞造の聞き書き『明治開化奇談』（一九四三）によるが、蝮のお政の後身だとして報知社の受付で威張っていた江戸っ子の女性がいたという。このように便乗者や偽物があちこちに出没していたことから、興行師がからんでの、実際の島津お政とも内田まさとも違う、蝮のお政を名乗る別人の女性による「祇園」の場末での芝居興行があって、そこに直哉が遭遇した（直哉は明治四〇年代に三、四回京都に赴いている）とも考えられるのだ。

『暗夜行路』における蝮のお政のモデル考にかなりの紙幅を費やしてしまったが、ここで日本近代文学史における毒婦ものの流行、その消長の跡に一瞥しておきたい

と思う。

いわゆる毒婦ものの草双紙がベスト・セラーになった始まりは、『鳥追阿松海上新話』全三編（明治十一年一月～三月）からで、ついで『夜嵐阿衣花廻仇夢』全五編（同年六月～十一月）、『高橋阿伝夜叉譚』全八編（明治一二年二月～四月）とつづき、お伝の場合はその処刑からわずか四ヶ月後には演劇にもなり、やがて毒婦ものはボール表紙本、探偵実話へと形を変え、演劇のみならず講談の好演目となって大正年代の初め頃まで持続したという。

だから、『暗夜行路』の謙作が箱屋殺しの花井お梅を実際に高座に見たこと（前篇第二の十三）、また直子が嬢のお政の話を「何だか、講談で読んだ事があるやうよ」としたこと（後篇第三の十三）などは、とりも直さず作者志賀が体験したことだとしてよさそうである。

志賀直哉はこのような毒婦ものにはさほどの興味を寄せなかった作家と思われるが、同時代作家の谷崎潤一郎は多大の関心、好奇心を向けていたようである。ちなみに「続悪魔」（一九一三・一「中央公論」）によると、強度の神経衰弱にかかっている主人公の佐伯は、こっそりと「高橋お伝」の講釈本を読み、さらにそのあと「佐竹

騒動姐妃のお百」というのを本箱の底から引き抜いて熱心に読み耽っているのである。また同じ谷崎の「お艶殺し」（一九一五・一「中央公論」）になると、そのラストシーンで、お艶が最初の恋人新助に殺される際、「息の根の止まる迄新しい恋人の芹沢の名を呼び続けた。」とされている。これは、高橋お伝が処刑される際、しきりに情夫小川市太郎の名を連呼したという逸話にピタリと合致するものではなからうか。それほどまでに明治前半期に流行した毒婦ものはしぶとく生き続け、大正初年代までその影響力を持っていたとしてよいのである。

だが、『暗夜行路』が「改造」誌上に連載されたのは一九二一（大正一〇）年以降である。この時期は、すでに毒婦ものはすたれ、それに代って明治中期以降からのナシヨナリズムの進行に伴い、「良妻賢母」の像が理想的な女性として世間一般に次第に浸透、根づいていたという事情を考慮しておかねばならないだろう。

三

『暗夜行路』における栄花の章とは、前篇第二の十一から十三にかけての部分を目指す。小説世界における時間

的推移の側面でいえば、謙作が尾道から帰京して一ト月余りを経過した頃から、大森への移転をはさみ、いわゆる〈憐れな男〉の部分（前篇第二の十三の半ばあたりから最終の十四まで。ここは先に「憐れな男」と題し一九一九年四月に「中央公論」に発表したものを改稿して『暗夜行路』に嵌め込んだのである。）に入る直前までの時期をいうのである。

なお、ここではあくまでも『暗夜行路』の文脈に即した読みに心がけたい。その際ポイントとなるのは次の二点である。第一に、栄花の章にスポットを当てることから、そこと栄花の章以外の『暗夜行路』の随所に散りばまれている様々なエピソード、あるいはワンカット、ワンシーンとの相互関係、有機的関連をみることであり、第二に、これは『暗夜行路』全篇に渡るきわめて特徴的な方法の一つとしてよい、いわば対照の美学といったものに着目することである。

ひと口に栄花の章といっても、大きく四つのブロックから形成される。その一つ一つを子細に検討する前に、この章における謙作の「心」の状態に注意しておかねばならない。尾道滞在時、謙作は、おのれの出生の秘密を兄信行の手紙によって明かされた。母と祖父との不義の

子だというのだ。が、それを知ってかえって「肯定的な明るい考」を持った。いい意味での「心」の緊張が到来していたのである。しかるに、それから一ト月余りを経た今は、「心の緊張が去るにつれ」、「時々参る事が多くなつ」ていた（第二の十一）という。これが栄花の章における謙作の「心」の起点である。

そういう折、謙作は「移転」を考える。環境の変化に伴う気持ち、気分的好転を期しての打開策としてよい。下降しかけている自分自身の「心」の状態を自覚し、それを上向きにさせようとしているのである。

何故、謙作の「心」の状態にこだわるのかといえば、『暗夜行路』という作品がその縦糸として、起伏に富んだ謙作の「心」のありようの変遷を描いている、とみるからである。

ともあれ、栄花の章のとは口にある謙作の「心」の状態は下降しつつあるのだ。

第一のブロックは、兄信行と石本が、謙作（まだ赤坂福吉町に住まう）を訪ねて来、やがて三人連れ立って柳橋の或る待合にその夕刻から夜を過ごした「或日」のことをいう。この待合の場面で謙作は桃奴という芸者を呼ぶもののついに彼女は現われることはなかった。そして

ここで若い芸者二人とその家の女中一人から、「昔の栄花、今の桃奴」が、「芸者の中でも最も悪辣な女」になっている、その噂を聞かされたのである。

まずは、この場のシチュエーションとして男三人に女三人がいる情景に注目したい。するとこれは前篇第一の一・二と類似し、小さな反復をなしていることに気づくのだ。

前篇第一の一・二といったが、厳密に言えば、阪口と竜岡が赤坂福吉町に住む謙作を訪れ、やがて三人連れ立ち吉原見物に出かけ、西緑という茶屋で登喜子（当初阪口が小稲を呼んだのだがその代わりに来た芸者）、豊（おしやく雛妓）、女中一人（「眼の細い体の大きな、象のやうな印象を与へる女中」とされている）を相手に、夜通しで軍師拳の遊びやニッケル渡しの遊びに興じたことをいう。男三人が連れ立って待合（茶屋）に出掛け、それを女三人が相手にするという情景は『暗夜行路』の冒頭部にすでにあつたのだ。私のいう栄花の章第一のブロックは、その内容こそいささか異なるものの、形のうえでそれとさわめて類似する経過とシチュエーションを現出させているのである。

ところで、噂に出された桃奴（昔の栄花）の具体的な

悪事とはいかなるものであつたのか。土地の古株の芸者と喧嘩をしたこと。自動車の中で酔った客の指輪を抜き取つたこと。古い事だが生まれたての自分の赤子を押し殺したこと。現在一人の若い人（石本の甥）を有頂天にさせ我儘一杯に振舞っていること。列挙されたのは以上のようなもので、「噂」であるからその真偽のほどは見定めがたいところがあるが、嬰兒殺しや窃盗、なるほど「悪辣な女」とされても仕方がないといえるだろう。

が、謙作はこのような桃奴（昔の栄花）に同情心を抱き、栄花をモデルとした創作に着手しようとする。それは、昔の栄花のイメージが鮮烈なためなのだが、直接的には、柳橋から帰つたあと、信行（次の日、謙作と五反田、大井方面に謙作の貸家捜しに出掛けることになっていて、この日は謙作の家に泊まるのである。）が、お栄に栄花のことを幾分誇張して話し、それにお栄が「ひどい女もあるものね」と言つたことに反撥を覚えたことにある。ここまでが第一のブロックである。

第二のブロックは、謙作らが柳橋の待合に出掛けた日のこと（第一ブロック）の中に挿入された栄花にかかわる回想シーンである。第一と第二のブロックを分かつたのは、謙作が何気なく「演芸画報」を見ていて、栄花の消

息を知った「或日」のこととなるのはいうまでもない。

この第二ブロックは、いわば栄花の〈物語〉を形成している。入れ子型の一種の作中作だと思えばよい。そのあらまは幾分詳しく書いておこうと思う。

謙作は少年の頃より祖父やお栄に連れられて芝居や寄席によく行っていた。中学生の頃からは一人でも出掛けようになり、殊に女義太夫をよく聴いたという。その頃の栄花は、十三歳の「小柄な娘」で、「白狐」を連想させる「青白い」顔、「甲高い」が「何処か悲しい響」を持つ声をしていた。謙作の寄席行仲間の一人は、「あれは斃れて後、やむ、といふ女だね」と適切と思える評を与えていたのである。一方、山本という華族の友人が、彼の家にある掘井戸が機縁となって隣家に住まう栄花と親しくなっていたが、二人の仲は深く進展していかなかった。やがて栄花は、「めき／＼と美しくなり」、「芸も上り、人氣も段々出て来」て、早之助三代目を継ぐという手筈となっていた。ところが不意に栄花は家出をした。近所の本屋の息子と失踪したのだ。が、その隠れ家はすぐに知れ、二人の仲は引き裂かれてしまった。栄花は養家の今川焼屋から絶縁される。元々曹長の私生児とかで、本当の子ではなかったという。この事件は栄花に二重、

三重、いやそれ以上の苦しみや不幸をもたらした。恋を失ったこと、養家から絶縁されたこと、義太夫の道が閉ざされたこと、さらに重要なことは、その時妊娠していた、その窮地にやさしい手を差し伸べて来た一人の男（悪足）のせい、か、腹の児は墮胎されたか生まれたてを押し殺したのだと噂されたのである。こうなれば転落の人生を辿るだけで、悪足に連れられ、新潟、さらに北海道で芸者になった、という噂を聞いていたのである。

こうしてそれから二、三年を経過した今現在の「或日」のこと、謙作は、栄花が東京に戻っていて柳橋から芸者に出ているという消息を得たのである。さらに、時間的にここから柳橋の或る待合に出掛けたシーンにつながっているのだ。

第二ブロック（娘義太夫時代の栄花の回想）で大切なのは、栄花が私生児であるということである。謙作は、その母と祖父との不義の子である。ともに世間から白眼視される存在なのだ。謙作は栄花と直接話したことは一度もなかったが、二人をつなぐ接点はまさにここにあるとしてよい。謙作が栄花に同情を寄せ、彼女をモデルにした小説を執筆しようとするそのモチーフにも納得がいくのである。

ところで、栄花と本屋の息子との間に出来た赤子は、栄花によって殺害された可能性が高いようだが、一方で墮胎されたのだともされていた。墮胎ということになれば、謙作は墮胎を免れた子（前篇第二の六）であり、その点で関連性があるわけだが、『暗夜行路』全体を眺めた場合、もう一つ墮胎に関連して響き合うエピソードがあることに気づく。

それは、前篇第一の一に示された阪口の小説世界にある。その主人公は、自家の十五六になる女中と関係して妊娠させ、出来た赤子を墮胎させたというのである。そのうえ、その主人公の友達（どうみても謙作をモデルにしていると思えない）が心ひそかにその女中を恋しているように書いてあるというのだ。ここに謙作は阪口に対し怒りを覚え、不快をその頂点にまで募らせたのである。

斎藤美奈子の評論『妊娠小説』（一九九四・六、筑摩書房）によれば、一八六八年は「墮胎薬の販売が禁止された年」であり、これは脱亜入欧策の一環としてなされたものであって、ついで「墮胎罪」の発足（一八八〇年の旧刑法、施行は八二年）、さらに刑法の改訂に伴う墮胎罪の罰則規定の強化（一九〇七年、施行は翌年）によつ

て墮胎管理は完成したという。むろんこの時期（明治末）として「ヤミ墮胎」は横行していて、今日では文学史の藻屑と消えた「墮胎系」の作品が数多く書かれていたことを斎藤は指摘している。

『暗夜行路』は、斎藤の表現を借りていえば、「望まない妊娠をした女」、すなわち謙作の母が、「嫌も応もなく生む」（墮胎罪は免れたことになる）ことで、この作の主人公時任謙作を誕生させた「出産系」の「妊娠小説」の一つだとさえ言えるかもしれない。が、阪口の小説の中に出てくる女中、および栄花の場合に焦点を当てると、これらは謙作の母の場合とは明確な対照をなしていることに気づくのだ。ともあれ『暗夜行路』にも、妊娠や墮胎のテーマは確固たるものとして存在していたのである。

第三のブロックは、前篇第二の十二全体である。小説の時間的進行に即せば、謙作が兄信行と一緒に五反田から大森方面に貸家捜しに出掛け（第一ブロックの翌日のこととなる）、やがて謙作の大森生活（お栄も一緒）が始まって間もなくの頃までとなる。

ここでは、栄花との対照として嫂のお政のことが回想されているのが重要である。

謙作は、「先年」（近接過去であろう）、京都の「祇園

の八坂神社の下の場末の寄席といったやうな小屋」で、懺悔する意味で自身の一代記を芝居にしている蝮のお政を見かけた。これは通りがかりのもので一瞥した印象を述べたものだが、お政は「気六ヶしさうな、非常に憂鬱な顔」をし、また「心が楽しむ事の決してないやうな顔」をしていたとされる。その「顔つき」から「其心持」を察しているのだ。しかし、この謙作の洞察力に信憑性があると我々読み手が感じてしまうのは、蝮のお政のことを語る直前に植木屋の亀吉のことが語られているからである。

植木屋の亀吉は、信行が同行した謙作の貸家捜しの道々で噂に出てくる人物である。謙作は、「或時」本郷の家で、実際に亀吉を一瞥しただけなのだが、「余りに見かけが好人物すぎ」とし、そこに見かけとは違う「一種の不自然さ」、漠然とした不信感を抱いていた。謙作はその時の感想をその「日記」にまで書きつけていたという。むろん亀吉は、信行ならずとも誰もが「ずるい事とされる心配はない」と思うやうな人物として印象づけられている。しかるに、この貸家捜しの「二三ヵ月後」のこと、亀吉が「本統の正直者」ではなく、なかなかの狡猾な男だと証明される出来事が起こったのである。これ

は謙作の人間洞察力の鋭さを示した好個のエピソードとなっているのである。

蝮のお政の場合も謙作は彼女を一瞥しただけであったのだが、その「顔つき」から、その「心」にやすらぎのないことを見て取ったのである。亀吉のエピソードの後だけに、謙作の一瞥による人間洞察力の鋭さ、その信憑性もまた疑いを入れなくなるのだ。

栄花と蝮のお政とが対照的に描かれているとしたが、そのメルクマールはその「心」のありようにある。お政には懺悔という「苦しい偽善」がからみ、その「心」の状態はよくないとする。むしろ悪事を働きつつあった時の「心」の状態の方がよかつたのではないかともしする。一方の栄花は、いまなお悪事を働いていて、「生々とした張りのある心」を持っているだろうとするのである。

謙作は栄花（今の桃奴）に会ってみる必要性を感じながらも、「億劫」を理由に彼女を訪ねることをしない。実際に彼女に会った場合を「想像」してみるが、「総て懺悔し悔改めた栄花」というものは「妙に空ろ」でしかないという。一種の固定観念のように、「斃れて後やむ」というのが栄花にはふさわしく、悪事を働きつつげているその「心」の張りに価値を置くのである。

その「心」の張りの有無は、謙作の対女性における好悪の基準であり、この場合栄花と娘のお政という悪女二人が比較され、前者はその「心」に張りのあることから好ましい者となり、後者はそれがないことから嫌悪の対象となるのである。

「心」の張りという観点でいえば、前篇第一の六で謙作が電車の中で見かけた、赤子を抱いた「若い美しい女人」が想起される。謙作は、この女性に「精神にも筋肉にもたるみのない、そして、何となく軽快な感じ」（傍点は志賀）を受け、自身の未来の細君としてこのような女性が来ることを想像するのである。これは明らかにのち（後篇第三の一）に登場する直子につながるが、いいくものである。が、軽快な点は差し引いても、「たるみのない」ということでいえば、栄花にもそれは言えることなのである。電車の中に見た「若い美しい女人」の延長線上におけるその後身を直子とすれば、罪とか悪がからんだいわば下降線に出現したその後身は栄花だといいだろう。

第四のブロックは、第二の十三前半部をいう。

謙作は又段々と参り出した。気候も悪かった。湿気の強い南風の烈しく吹くやうな日には生理的に彼は半

病人になつてゐた。そして生活も亦乱れて来た。

右のようにしてこのブロックは開始される。謙作の「心」の状態は、生理的悪条件も重なり、次第に下降のカーブを描きつつあるのだ。

ここで謙作は女の罪について思索を巡らす。罪の報いという点で、男の場合と女の場合とが対比される。具体的には、本屋の息子と栄花の、それぞれのその後のことによつてコントラストが形成されるのだ。本屋の息子の場合、栄花との間に出来た自身の初児は生かされておくことはなかったのだが、今は、別の女性（親の承諾を得て結婚した女性）との間に出来た赤ん坊をその膝の上に乗せ、父親として気楽に落ちついているように見えた。彼の場合、過去と現在とが断絶している。しかるに女の栄花の場合は、本屋の息子と同じ過去を持つものの、それは断絶することなく現在に連続しているというのだ。ここから先は多分に一般論として敷衍されていて、男の場合でも、過去の一つの罪から惰性的に自暴自棄な生活が続いていることもあるが、女の場合は、より絶望的になる傾向が強く、しかも運命に対し盲目的で、また「周囲」が男の場合より厳格で、その「罪の報から逃れる事を喜ばない」とするのである。

ここで問題とされている中心点は、男の罪および女の罪が「周囲」とどのような関係にあるかということである。このあたりの文脈に頻出する「周囲」ということは、世間ということばで言い換えることが可能である。世間とは男性中心の社会のことであり、それは男が中心になって形成してきたものである。それ故、男の罪の場合は寛容となる。しかるに、世間（男社会）によって男より劣るものとして位置づけられた女の場合、その罪は許容されにくいのだ。男尊女卑の考えがきわめて強い社会にあつては至極当り前のこととしてよいだろう。だが、まがりなりにもそれに疑問を投げ掛けた謙作を今日の我々がけなすことはできない。

ついで、同じ女の罪でも、栄花と謙作の亡き母とが対比される。結論からいえば、栄花の場合はその「周囲」が愚かであり厳格に過ぎた、謙作の母の場合は、その「周囲」が賢く寛大であつたということになる。つまり彼女らを取り巻く「周囲」（近親者や関係者）の賢愚の差に帰結しているのだ。

謙作が生まれるに当たってはそこにドラマがあつた。ここで前篇第二の六の信行の手紙の内容を想起せねばならない。父方の祖父（実の父）と祖母は、父に秘密にし

て墮胎をしようとした。が、母方の祖父（芝の祖父さん）は墮胎することに反対する。そのうえ娘が離縁されるのを覚悟のうえでドイツにいる父に事実を報告した。ところが、父は総てを許すしたのである。墮胎を免れた子である謙作は、この世に生をうけたことを是として、芝の祖父および父（本郷の父）に感謝するのだ。——ただし、謙作は当時の母の気持ちを深く想像してみることはしない。いかに罪の子とはいえ、妊娠した子を出産できたのを「幸福」だとするのである。また、当時の父の気持ちを忖度する度合も薄い。——

一方の栄花の場合は、本屋の息子の親および栄花の養家の理解を得ることができなかったのだと容易に想像がつく。両者の親たちは当然ながら世間体を第一としたのだ。そして本屋の息子は、男であるが故に、やがて若気の過ちとして許されたに相違ない。しかるに栄花は、女なるが故に、また養家の愛情不足も加わってか、ひとり見放されたのである。孤絶する栄花。そこに出現した悪足によって、墮胎もしくは嬰兒殺しが敢行されねばならないところに追い込まれたのである。

謙作は栄花をヒロインとした小説を書いている。結局は完成されず発表にも至らなかつたのだが、その構想の

幾つかは示されていた。

まず、「栄花が或時蝮のお政に会ふ事を書いてもいいかも知れないと思つた。」というところに注目したい。だが、謙作は蝮のお政がどのようなことをしたのかを知らなかった。蝮のお政にも栄花とは別趣の〈物語〉がある(むろんそこに男がからむ)のであって、いやしくも小説家であるならば、それを調べてみるべきではなかつたらうか。そうすれば、栄花と蝮のお政の会見の場は、「世間」と女の罪の關係、女の自我の問題などが浮き彫りにされ、ダイナミックなものになつたのではないか。しかし謙作は蝮のお政の〈物語〉には関心が無い。蝮のお政がその罪を売り物にしている、その一事をもって嫌悪の対象とするだけなのだ。それ故、蝮のお政と同様の所に位置する花井お梅のことも素材となつてくる。「頃丁度矢張り寄席芸人として出てゐた、箱屋殺しの花井お梅といふ女を見る事なども書いていいかも知れないと考へた。」といふのである。謙作が花井お梅を高座に見て「惨めな、不快な感じ」を受けたのと同様に、小説中のヒロイン栄花も同じような気持ちを抱いたことを書くこととしたのだと思う。が、これではあまりに作者謙作につきすぎ、広がりや深みに欠けてしまふのではないか。

謙作の創作は無残にも挫折する。その理由を、「これまで女の心持になつて、書いた事はなく、そういう「手慣れない事」も重荷となり、また、具体的には「北海道へ行くあたりから先が、如何にも作り物らしく」なつて「氣に入らなくなつて来た」ためだといふのである。その「想像」力には限界があつたといふことか。それならば、それを打開すべく今度こそ勇を鼓して、謙作は実際に栄花(今の桃奴)に会いに行くべきではなかつたのか。そうすれば新しい局面が開けたかもしれない。小説家としては積極性に欠け、やはり小説の書けない小説家とされても仕方のないものを感じるのである。

しかし、それを非難しても始まらない。結局は流産してしまつた小説なのだが、その眼目は掬い取ることができる。それは、罪を犯した女たちとして栄花を中心に、蝮のお政や花井お梅も登場させ、後者二人は自身の罪を売り物にしていることから「苦しい偽善」があるとして否定的、批判的に描き、栄花の場合は、「寧ろ罪を罪のままに押し通してゐる女の心の張り」(傍点は引用者)を肯定的にみる、そういうものであつたと推察できるのである。

が、皮肉にも、『暗夜行路』の主人公である時任謙作

の「心」がその「弾力」を失ってしまうのだ。不義の子と知ったその直後からの「心の緊張」はすでになくなっていた。こうして〈憐れな男〉の部分へと接続していくのである。

四

栄花の章は『暗夜行路』全体においてここだけが浮いているといった性質のものではない。それ以前のエピソードやワンカット、ワンシーンとの関連については先に述べた通りである。では、それ以降のものとの関連、いわば栄花の章の行方について触れておきたい。

謙作は栄花への同情から彼女をモデルとした創作を試み挫折する。が、その過程で「本統に一人の人が救はれるといふ事は容易な事ではないと思つた。」(第二の十一)とあるように、謙作に栄花を通しての人間弁護から人間救済の念があつたことは確かである。それならば、栄花を救うことなく終わってしまったのだろうか。

第二の十四は、栄花の章の直後の〈憐れな男〉の部分だが、ここにこのテーマのひとつの決着を見出すことができる。

突飛な言い方かもしれないが、ここで謙作は、栄花の形を変えた後身の或る女性と結婚するのだ。むろん現実世界でのことではなく想像世界においてである。

その女性とは、京都訛りを真似るプロステイチュートである。気持ちの極端に落ち込んだ謙作は、「根こそぎ、現在の四圍から脱け出」て、「今までの自分、——時任謙作、そんな人間を知らない自分、さうなりたかつた。」として、次のような想像を巡らす。

今まで呼吸してゐたとは全く別の世界、何処か大きな山の麓の百姓の仲間、何も知らない百姓、しかも自分がその仲間はづれなら一層いい。其処で或る平凡な醜い、そして忠実なあばたのある女を妻として暮らす、如何に安気な事か、彼は前日の女を想つて少し美し過ぎると思つた。然しあの女が若し罪深い女で、それを心から苦んでゐるやうな女だつたら、どんなにいいか。互に惨めな人間として薄暗い中に謙遜な心持で静かに一生を送る。笑ふ奴、憐む奴、などがあるにしても、自分達は最初からさういふ人々には知られない場所に隠れてゐるのだ。彼等は笑ふ事も憐む事も出来ない。そして仮令笑つても憐んでも、それは決して自分達の処までは聴えて来ない。自分達は誰にも知られずに一

生を終つて了ふ。如何にいいか——。

(傍点は志賀、傍線は引用者によるものである。)

謙作は、どこかの山麓の百姓、しかも村八分にされて
いるような者に変身したいと願う。そして、この疎外に
よる孤独の中にあつて、その伴侶は、想像裡の醜い女よ
りも現実性のある「前日の女」(京都訛りを真似たプロ
ステイチュート、「昨日の後の人」)を想定し、しかも彼
女が「罪深い女で、それを心から苦んでゐるやうな女だ
つたら、どんなにいいか。」とするのである。これは、
自身の罪を懺悔することなく「斃れて後やむ」のイメー
ジを持つ栄花のまさしく後身といえまいか。罪を背負つ
た、互いに名もなき男と女、そういう一對の夫婦として
謙遜な心持ちで静かにその一生を送る。このような想念
世界で謙作は栄花と結ばれ、それによって栄花も救われ
たのだといえまいか。

なお、これは『暗夜行路』の文脈と作者志賀側のもの
との関連から言うのだが、京都訛りを真似たプロステイ
チュートの「自家」は「深川」とされ、栄花の章の淵源
となつた一九〇五年一月一六日の日記に記された落想メ
モおよび未定稿「お竹と利次郎(梗概)」(一九〇六・一・
九)における女主人公(お竹)の住まいが「深川」であつ

たのは、単なる偶然ではなく、その深層の領域で両者の
根が同じものであつたことを証左するものと思われる。

もっとも、未定稿「マリイ・マグダレーン」(一九二三・
六・二四)では、竹の助(栄花の前身、広勝がモデル)
の住まいは「四谷」となつていて、木下利玄が四谷に住
んでいたことから、おそらくこれが事実だと受けとめら
れる。そして『暗夜行路』では、モデル問題を配慮して
か、栄花の住まい(「元、栄花のゐた^{あた}辺」・第二の十三)
の地名は明記されていない。しかしながら、そのスター
トラインにあつた一九〇五年一月一六日の落想メモおよ
び「お竹と利次郎」では、女主人公(お竹、やがて竹の
助↓栄花となる)は「深川」の亀の子焼き屋(駄菓子屋、
やがて亀の子焼きを作る家↓今川焼屋となる)の養女で
あつた。その構想の初期の段階にあつた栄花の住まい
と、京都訛りを真似たプロステイチュートの住まい、す
なわち同じ「深川」という地名の重なりは重視されねば
ならないのである。

こうして、その「心」がドン底状態にある謙作が、見
知らぬ山麓での、栄花の後身とみられる京都訛りを真似
るプロステイチュートとの同棲を夢想することで、その
栄花救済のモチーフも結実したと思われるのである。

ところが、しばらく時間を置いて、栄花は、嫂のお政とともに、後篇第三の十三で再び話題に上ってくる。

ここでそこに至るまでの概略を述べれば、京都に住まいを移した謙作は、そこで見初めた直子とトントン拍子に結婚することができた。直子は、「鳥毛立屏風の美人」(友人高井の評、第三の三)のイメージで、古雅な、いわゆる良妻賢母型の女性として登場する。「斃れて後やむ」(謙作の仲間の一人の評)のイメージに通う栄花のような悲劇的かつ悪女的タイプの女性とは対照的だといえる。では、謙作の好みの女性のタイプも変わったのか。だが、謙作が直子と疏水べりを歩くシーンで、「後から来る直子の、身体の割りにしまつた小さい足」の歩み(第三の十二、傍点は引用者)を感じるところには、その「小さい足」のみならずその「心」にも張りのあることを窺わせている。だから直子は、その外形やイメージこそ異なれ、芯のところでは栄花同様の謙作好みの女性であったのだといえるのである。

さて、問題の第三の十三は、結婚後の謙作と直子が「祝物の返しの品」を買いに外出した日のことを中心にしている。用事が済んだ二人は、やがて祇園の茶屋町から東山側の電車通りに出、そこで謙作が「嘗つて」嫂の

お政を見たという「場末の寄席のやうな小さい芝居小屋」の前を通りかかった。この折、謙作と直子に對話が繰り広げられるのだが、ここで謙作が栄花と嫂のお政とを比較し、その「心の状態」として栄花の方に軍配を上げるのは以前と変わりないにしても、直子の発言によって、直子のいう「悪い事」と、お政や栄花の「悪い事」とが「一緒にならない」としていることにまずは注目する必要がある。このシーンのはのちの直子の過失の遠い伏線としても機能しているのだが、ここでは謙作によって、直子は、嫂のお政や栄花とは峻別された所に置かれる。別言すれば、ここで栄花は嫂のお政と同じ範疇に位置づけられてしまうのだ。むろん、ひとくちに「悪い事」といっても、その内容には程度の差がある。なるほど栄花には嬰兒殺しの疑いや窃盗の噂があった。また、嫂のお政の悪事については謙作はよく知らないというが、たいがい窃盗の類だろうとの見当はついてはいたはずだ。繰り返せば、「悪い事」の内容で、栄花は嫂のお政と同類となり、以後謙作の意識の中で栄花は色褪せた存在として後退していく。現に、これ以降謙作は栄花に触れることはない。そして、直子の比重がどんどん大きくなっていくのだが、ここでは直子とその種の「悪い事」をする

ことは十中八九、いや絶対にないと謙作は信じ込んで
いる。ここまでは、ほとんど大きな問題はないといえる。

しかるに、「悪い事」には懺悔や悔悟ということがか
らんでくるというふうには話が発展しているのので、「悪い
事」の意味概念は、「誰れでも救せる程度のもので」では
ないものにまで拡大してしまった。ここに女の〈性〉に
かかる過失や不義がからむのはいうまでもない。だか
ら謙作は、「不図」亡き母のことを思い浮べ、「陥穴おとしあな
落ちたやうな気」がして、口をつぐんでしまったのであ
る。

謙作は母の過失（不義）について考えることを避けて
いる。第三の八で謙作は母の郷里亀山を訪ねるが、「総
ては自分から始まる。俺が先祖だ」として、母の結婚以
前のことを穿鑿するのをやめる。まして母と祖父、およ
び父との間にあった過去のドラマも探ろうとはしない。
母については、ひたすら自分を本当に愛してくれた唯一
の存在（前篇「序詞」の屋根事件、羊羹事件がそれを例
証する）として封印し、聖域に閉じこめようとするので
ある。

直子の場合には、現実に降りかかってきたものだけに苦
しむ。その過ち（不義）を理性で許しても感情で許せな

いものが残った。これは『暗夜行路』後篇の中心テーマ
であり、むろんそこには女の〈性〉の問題が深くかかわ
るのだ。現に、謙作は大山にあっても（第四の十五）、
「あの女は決して盗みをしなさい、これは素直に信じられ
ても、あの女は決して不義を働かない、この方は信じて
も信じても何か滓のやうなものが残った。」（傍点は引用
者）としているのである。

謙作の母および妻直子における罪の問題（それは厳密
に言って過失か不義か定かではない）については、稿を
改めて考察せねばならぬと思うが、この『暗夜行路』の
メインテーマをその側面から支えたのは、栄花および蝮
のお政のエピソードであったともいえる。

本稿では、『暗夜行路』における栄花の章に焦点を当
て、『暗夜行路』の持つ魅力の幾つかを述べてきたつも
りである。栄花にしる蝮のお政にしる、謙作の回想シー
ンで語られた女性に過ぎないが、きわめて印象的で、な
んと生彩を放っていることか。この二人のいわば悪女の
エピソードは、『暗夜行路』にその小説としての幅と深
みを確実に与えていたのである。

《注》

- (1) 青野季吉『「暗夜行路」について』(『志賀直哉研究』河出書房・所収論文、一九四四・六)
- (2) 中村光夫『志賀直哉論』(文藝春秋新社、一九五四・四)
- (3) 蓮賀重彦『廃棄される偶数 志賀直哉『暗夜行路』を読む』(『國文學』、學燈社、一九七六・三)。のち『私小説』を読む』(増補新装版)(中央公論社、一九八五・一一)に収録。
- (4) 拙稿「志賀直哉と娘義太夫」(『志賀直哉全集第四卷』「月報」、岩波書店、一九九九・三)でその概略は既に述べている。
- (5) 阿川弘之『志賀直哉下』(岩波書店、一九九四・七)
- (6) 『日本近代文学大系31 志賀直哉集』(角川書店、一九七二・一)
- (7) 江種満子『「暗夜行路」の深層』(『女が読む日本近代文学 フェミニズム批評の試み』(新曜社・所収論文、一九九二・三))
- (8) 『日本女性人名辞典(普及版)』(日本図書センター、一九九八・一〇)
- (9) 谷川徹三『「暗夜行路」覚書』(『文芸』、一九三七・一二、一九三八・一)は、栄花をめぐるエピソードが描かれていることをもって、『暗夜行路』を「人間弁護の書」であるとしている。